

ヒスイ勾玉まがたまを納めた褐鉄鉢



奈良市から平群町にかけて分布する200万年前の大阪層群中で形成される褐鉄鉢は、良質な粘土の周辺に鉄分が凝縮して生成された自然の鉱物です。表面は褐色を呈し、5ミリの前後の砂礫れきが多く付着し、大きいものでは1・5ミリもあります。

褐鉄鉢の内部の粘土は乾燥収縮し、それが内壁に当たって音をたてるため、江戸時代の好事家の間では「鳴石なるいし」や「鈴石すずいし」として、珍重されていました。

ミュージアムに展示されている褐鉄鉢は、発掘調査時には内部に泥が充満しており、単なる岩石として取り上げられていました。その後の遺物洗浄で内部の泥を除去すると、中に2個のヒスイ勾玉と土器のかけらが入っていることが判明しました。出土状況から判断して、中空の褐鉄鉢に2個のヒスイ勾玉を入れ、土器片で蓋ふたをしたと推定できます。この褐鉄鉢は、まさにヒスイ勾玉を入れた宝石箱といえます。

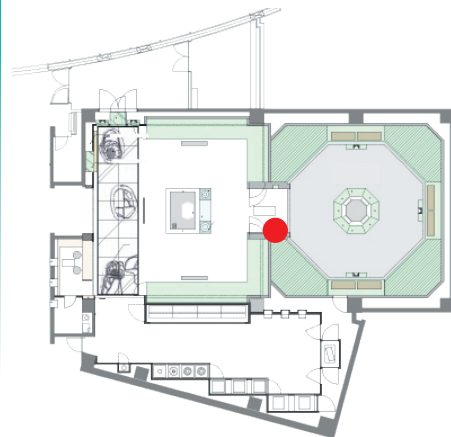
中国では、褐鉄鉢の中の粘土が

「太たい」(乙) 余糧よりょう・禹余糧うよりょうと呼ばれ、薬として利用されました。現在でも、下痢止めなどの漢方薬として販売され、山東省では「木魚石もぎょせき」とも呼ばれています。

「太乙禹余糧」という名称は、中国では、4世紀に葛洪かこうが著した『抱朴子ほうぼくし』の中に早くもみられ、不老長寿を理想とする神仙思想の薬として珍重されてきました。日本でも正倉院に「太一禹余糧」が所蔵され、薬として利用されたと考えられています。

唐古・鍵遺跡で出土したヒスイ勾玉を納めた褐鉄鉢容器は、全国でまだ類例がありませんが、唐古・鍵ムラの人が褐鉄鉢の中の粘土を仙薬として使っていたならば、2000年前の弥生時代に中国の神仙思想を理解していたこととなります。

褐鉄鉢容器の発見は、物や技術だけでなく、精神文化の面においても、大陸との深い関連があったことを示しています。



ミュージアム上面図と展示位置

●コレクション・データ

時代 弥生時代中期
調査 唐古・鍵遺跡第80次調査
発見年 2000年
大きさ 縦14.5cm、横13.2cm、高さ6.9cm
展示位置 第1・2室 ゲート・小窓ケース